

# 日本語発話冒頭の「だ・です」の出現

## The Occurrence of the Initial "da/desu" in Japanese Speech

鄧 瑾瑄<sup>†</sup>

Jinxuan Deng

<sup>†</sup> 京都大学大学院

Kyoto University

deng.jinxuan.48e@st.kyoto-u.ac.jp

### 概要

現代日本語共通語では、「だと思う」「ですね」のように、自立性のない判定詞「だ・です」が発話冒頭に現れうる。本発表では、発話冒頭において「だ・です」の出現が義務的な場合、任意的な場合、不自然な場合の観察を通して、発話冒頭の「だ・です」は、先行研究での代用語ではなく、先行文脈を会話参加者の間で共有されている情報として明示する行動であると主張する。

キーワード：発話冒頭、だ、です、出現、明示、行動、コミュニケーション場面

### 1. はじめに

現代日本語共通語では、「だと思う」「だそうです」「ですね」のように、自立性のない判定詞[1]「だ・です」が発話冒頭に現れうる。例えば、以下の例(1)を見られない([2]による)。

- (1) [「あの人って、話、長くない?」と訊かれて]  
ですねえ。

このような発話は、冒頭に自立性がなく、それだけに、先行文脈への依存が目立つので、「接ぎ穂発話」[2]とも呼ばれている。

本発表は、発話冒頭における「だ・です」の出現が義務的な場合、任意的な場合、不自然な場合の観察を通して、発話冒頭の「だ・です」の実体を明らかにするものである。

### 2. 先行研究とその問題点、本発表の主張

発話冒頭の「だ・です」に関する先行研究[3][4]は、「だ・です」を前件述語あるいは(非)言語的文脈の代用と位置付けている。しかし、これらの先行研究は、発話冒頭の「だ・です」の多様な振る舞いを説明できない。

具体的には、次節から詳しく考察するように、発話冒頭における「だ・です」の出現は、義務的な場合、任意

的な場合、不自然な場合がある。「だ・です」の出現が、いつ義務的になり、いつ任意的になり、いつ不自然になるかは、これらを代用語と考えても答えられない。

本発表では、発話冒頭の「だ・です」は、代用語ではなく、先行文脈を会話参加者の間で共有されている情報として明示する行動であると主張する<sup>1</sup>。

以下の第3節、第4節、第5節では、発話冒頭における「だ・です」の出現について、義務的な場合、任意的な場合、不自然な場合を一つずつ取り上げ、観察を通して、上記の主張の妥当性を示す。説明の便宜上、まず任意的な場合を取り上げ(第3節)、次に不自然な場合(第4節)、最後に義務的な場合(第5節)を取り上げる。

### 3. 「だ・です」の出現が任意的な場合

例えば、先行研究[4]が挙げる実例(2)では、Yの発話冒頭に「だ」が出現しているが、削除しても発話の意味は大きく変わらないと思える。また、先行研究[2]が挙げる実例(3)では、末尾のBの発話冒頭に「だ」が出現していないが、「だ」を加えても発話の意味は大きく変わらないと思える。これらの「だ」は任意的と言える。ここではこのような「だ・です」を取り上げる。

- (2) K: でも日本人がよく泊まるホテルだったんでしょ、で、いいホテルだったんじゃない。  
Y: だと思っただけどね。

- (3) A: あでも教務行ってー「409のカギ」って言ったらー  
B: うん  
A: 観れんの普通に?  
B: [空気すすり] と思うけどな

このような「だ・です」の任意性は、「有無によって

<sup>1</sup> ここでの「明示する行動」は、日常語とは異なり、必ずしも意図的ではないものとする。

発話の意味が大きく変わらないように思える」という発表者の多分に主観的な判断だけでなく、アンケート調査という、より客観的な形でも確認できる。

前述したように、本発表では、発話冒頭の「だ・です」は、先行文脈を会話参加者の間で共有されている情報として明示する行動であると主張する。この主張によると、「だ・です」が出現してもしなくてもよい（つまり、任意的）ということは、先行文脈を会話参加者の間で共有されている情報として明示してもしなくてもよいということの意味する。本発表は、この出現が任意的なパターンを、発話冒頭の「だ・です」の出現の3パターンのうち、「デフォルト」のパターンと位置付ける。つまり、先行文脈を会話参加者の間で共有されている情報として明示することは、通常はしてもしなくてもよいことである（出現が任意的）。しかし、コミュニケーション場面により、そうした行動が、容認されなくなったり（出現が不自然）、逆に必須になったり（出現が義務的）することもある。

実は、「だ」の出現が任意的と考えられている発話「と思う（「だと思う）」も、コミュニケーション場面によって、「だ」が出現する「だと思う」の方がより自然になる場合がある。例えば、以下の例（4）を見られたい。

- (4) (いつも約束の時間に遅れてくる友人と、待ち合わせをした。約束の時間になると、スマホの電話が鳴り、出るとその友人である。友人は「ごめんごめん。ちょっと急用で、5分遅れるわ」と言った。この発話に対する返答は以下のようなものである)

[いつも遅れてくる友人に「5分遅れるわ」と言われて]

- a. と思ったよ。
- b. だと思ったよ。

ウェブページを介したアンケートで、この2つの返答発話（4a）と（4b）の自然さを調査したところ、以下の図1、図2に示す結果を得た。この調査は20代から70代以上までの日本語母語話者104人（性別・出身地域は問わない）に、自然さを1点～5点の5段階で問うものであった（1点：とても不自然～5点：とても自然）。図の横軸と縦軸はそれぞれ点数、人数である。

図1、図2は、（4a）と（4b）がいずれも総じて自然であることを示している。

もっとも、（4a）と（4b）が同程度に自然というわけ

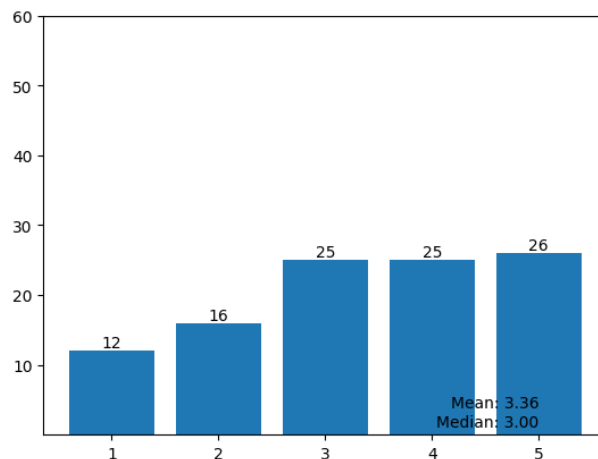


図1 発話（4a）「と思ったよ」の自然さ

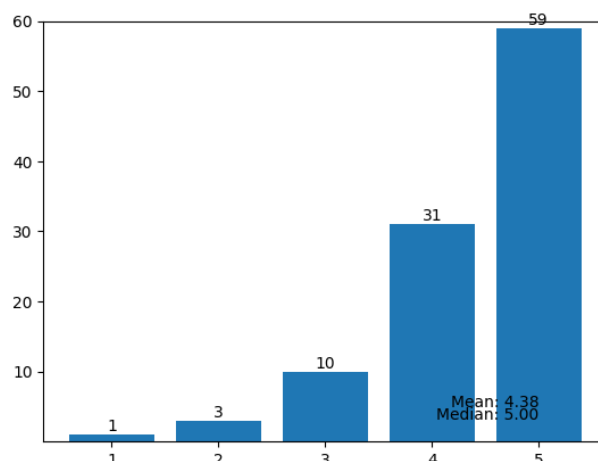


図2 発話（4b）「だと思ったよ」の自然さ

ではなく、（4b）の方が自然さが高い。ウィルコクソンの符号順位検定（Wilcoxon signed-rank sum test, 以下も同様）によれば、（4a）と（4b）の間の自然さの差は統計的に有意である（ $p < 0.05$ ）。本発表の主張は、この自然さの差異を説明できる。

いつも遅れてくる友人からの「5分遅れるわ」の連絡に対して、半ばからかいながらちょっとした不満を込めて、「あなたのことだから、今回も遅刻するかと思った。やっぱりそうだ」という気持ちで返答する場面は容易に想像できるだろう。この場合、先行文脈（友人が遅刻すること）を会話参加者の間で共有されている情報として明示する「だ」の出現する「だと思った」の方が、よりコミュニケーション場面（話し手が友人が遅刻することを既に予想していた場面、つまり「友人が遅刻する」という情報は既に会話参加者の間で共有されている場面）にうまく適合した発話なので、自然さがより高いと考えられる。

以上のように、「だ・です」の出現が任意的な場合、「だ・です」の有無が自然さの差を生むことがある。本発表の説は、この差を、コミュニケーション場面との絡み合いによって説明できる。

#### 4. 「だ・です」の出現が不自然な場合

例えば以下の例(5)では、「だ・です」の出現は不自然である。

(5) (授業前に教室に入ると、誰もいなかった。その時、たまたま通りかかった面識のない大学生に「今日は学園祭の前日だから、授業は全部休みですよ」と教えられた。この発話に対する返答は以下のようなものである)

[「今日は学園祭の前日だから、授業は全部休みですよ」と言われて]

- a. ?ですか? (「か」は上昇調)
- b. ?ですか. (「か」は下降調)

先ほどと同じアンケートで調査した結果(但し回答者は無回答の2名を除き102名)、(5a)(5b)の評点は図3、図4のように、右肩上がりとは大きく異なる分布となり、概して不自然である。

但し、細かく見れば、両発話の自然さには差がある。「か」が上昇調の(5a)「ですか?」よりも、「か」が下降調の(5b)「ですか。」の方が自然さが有意に高い( $p < 0.05$ )。

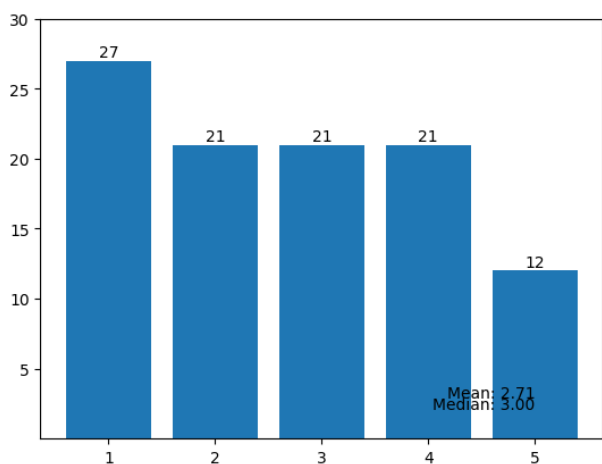


図3 発話(5a)「ですか?」(上昇調)の自然さ

本発表の仮説は、発話(5a)(5b)の不自然さと、両

者の差をともに説明できる。

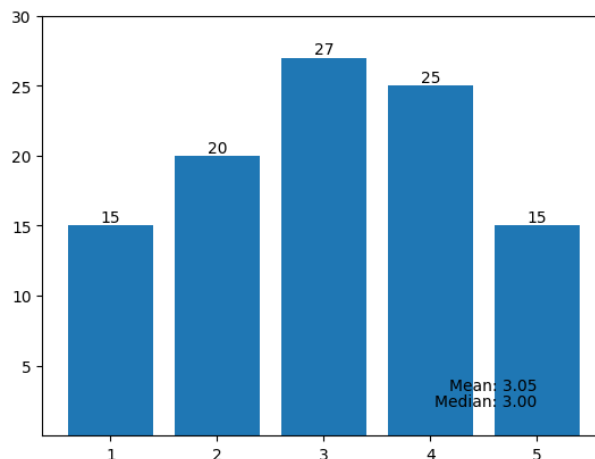


図4 発話(5b)「ですか。」(下降調)の自然さ

まず、(5a)も(5b)も不自然である原因は、発話冒頭の「です」にある。自分にとって新しい情報[今日は学園祭の前日だから授業は全部休み]を相手から受け取る際に、発話冒頭の「です」を発して、その先行文脈を既に会話参加者の間で共有されている(つまり話し手も知っている)情報として明示することは不自然だろう。

では、終助詞「か」の下降調は、「です」発話をなぜ多少とも自然にするのか。一般に疑問の終助詞とされる「か」は、上昇調の文末に現れれば主として疑問しか表さないが、下降調の文末に現れれば、純然たる疑問の意味を表すとは限らず、しばしば「該当の情報が新しく獲得されたばかりの事実」という新規獲得事実の意味が混じった意味を表し、時には純然たる新規獲得事実の意味を表す[5] (これは[6]では「疑問型情報受容」, [7]では「納得」とも呼ばれている)。この下降調の「か」の新規獲得事実という意味は、新しく獲得した情報を既に共有されている情報として明示する発話冒頭の「です」とはほぼ逆方向の意味と言えるので、「です」の不自然さを緩和する効果を持つと考えられる。

#### 5. 「だ・です」の出現が義務的な場合

次の例(6)を見られたい([4]による。改変あり)。例(6)では発話冒頭の「だ」が必須で、「だ」がない発話(6a)は不自然、「だ」がある発話(6b)は自然である。本発表の主張は、このことを説明できる。

- (6) (課長が社員たちのもとにやってくる、社員 P に)  
 田中さんは昨日緊急入院したから、今週はお休み  
 ということで。  
 (課長が席に戻って行く。社員 P が後ろに座る社員  
 Q に)  
 a. ?そうです。  
 b. だそうです。

例 (6) では、課長は田中氏の欠席を社員 P に対して述べている以上、社員 P が社員 Q に対して課長の話伝えることは不自然ではない。しかし、社員 P と Q の空間的位置が近接しているため、田中氏の欠席を告げる課長の発話は Q にも聞こえていることが明確である。以上の事情から考えれば、P が Q に対して発話する際に、話の内容(先行文脈)を会話参加者の間で共有されている情報として明示する必要があるというのはもつともなことだろう。

次の例 (7) でも、冒頭の「だ」の出現は義務的である。(この例は[2]による。改変あり)

- (7) (自称預言者の発言「みんな逃げろ。火星人が襲ってくるぞ」を聞いた非信者が、侮蔑も露わにせせら笑って、傍らの仲間(やはり非信者)にささやく)  
 a. ?そうです。  
 b. だそうです。

例 (7) でも、自称預言者の発言が傍らの仲間にも聞こえていることを話し手が確信している。そのため、その発言の内容(先行文脈)を会話参加者の間で共有されている情報として明示する必要があることは、例 (6) と同様である。

## 6. おわりに

本発表では、発話冒頭に出現する判定詞「だ・です」について、それらが先行研究での代用語ではなく、先行文脈を会話参加者の間で共有されている情報として明示する行動と主張した。この主張は、発話冒頭における「だ・です」の出現についての観察に基づいている。発話冒頭における「だ・です」の出現が任意的な場合、不自然な場合、義務的な場合の 3 つに分けて展開された観察を通して明らかになったのは、発話冒頭に「だ・です」を発して先行文脈を会話参加者の間で共有されている情報として明示することは、通常はしてもしなく

てもよいが(「だ・です」の出現が任意的)、コミュニケーション場面により、そうした行動が、容認されなくなったり(「だ・です」の出現が不自然)、逆に必須になったり(「だ・です」の出現が義務的)することもある、ということである。

## 謝辞

本発表は日本学術振興会の科学研究費補助金(基盤(S)20H05630)の成果の一部である。

## 文献

- [1] 寺村秀夫, (1982) 日本語のシンタクスと意味 I, くろしお出版.
- [2] 定延利之, (2020) “自立性が無い日本語「接ぎ徳発話」の意味-語用論”, 日本語プロフィシエンシー研究, Vol. 8, pp. 77-94.
- [3] 奥津敬一郎, (2001) “接続のうなぎ文-やっぱり述語代用説-”, 日本語教育, Vol. 111, pp. 2-15.
- [4] 劉雅静, (2010) “談話レベルから見た「だ」の意味機能-「だ」の単独用法を中心に-”, 言語学論叢 オンライン版, Vol. 29, No. 3, pp. 90-107.
- [5] 定延利之, (2021) “染み込み速度と「た」-さまざまな現象の中で”, 庵功雄・田川拓海(編) 日本語のテンス・アスペクト研究を問い直す 第2巻: 「した」「している」の世界, ひつじ書房, pp. 71-93.
- [6] 森山卓郎, (2000) “基本叙法と選択関係としてのモダリティ”, 森山卓郎・仁田義雄・工藤浩(編) 日本語の文法3モダリティ, 岩波書店, pp. 3-78.
- [7] 井上優, (2019) “納得の「か」をめぐって”, 言語と文明, Vol. 17, pp. 53-60.